県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報

尾崎西遺跡

平成４年度

東側丘陵部東尾根空中写真

1993.3

香　川　県　教　育　委　員　会

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

例　言

1　本書は，県道高松長尾大内線道路改良事業に伴い平成４年度に実施した尾崎西（おさきにし）遺跡の発掘調査の概要を記録したものである。

2　本調査は，香川県土木部道路建設課からの依頼をうけ，香川県教育委員会が調査主体となり，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3　本年度の調査組織は，次のとおりである。

総括	所　長	松本　豊胤	
	次　長	市原　敏則	
総務	係　長	土井　茂樹	
	係　長	今田　修	
	主任主事	黒田　晃郎	（平成４年５月３１日まで）
	主任主事	大西　健司	（平成４年６月　１日から）
調査	文化財専門員	西村　尋文	
（発掘）	技　師	山本　主税	
	技　師	森下　英治	
	調査技術員	安川　彰司	

4　調査にあたっては，次の機関や方々の協力を得た。記して謝意を表したい。

香川県土木部道路建設課，香川県長尾土木事務所，長尾町教育委員会，宝蔵院極楽寺，尾崎東自治会，長尾町文化財保護協会，長尾小学校，長尾中学校，霧生孝弘，石野博信，田中清美，定森秀夫，松井章（順不同，敬称略）

5　本書の執筆は調査担当者が分担して行い，編集は森下が行った。

6　本書で使用した遺構略号は，次のとおりである。

ＳＨ 竪穴住居　ＳＢ 掘立柱建物　ＳＤ 溝　ＳＲ 自然河川　ＳＡ 柵
ＳＥ 井戸　ＳＫ 土坑　ＳＰ ピット　ＳＴ 墓　ＳＸ 不明遺構

7　挿図の一部は，国土地理院地形図（1/50,000）を使用した。

本文目次

1．調査の経緯と経過 …… （西村） …… 1

2．遺跡の立地と環境 …… （森下） …… 1

3．調査区の設定と地形区分 …… （森下） …… 3

4．調査成果の概要

1）縄文時代 …… （森下） …… 4

2）弥生時代前期・中期 …… （森下） …… 9

3）弥生時代後期・終末期 …… （森下） …… 9

4）古墳時代 …… （森下・山本） …14

5）古代 …… （森下） ……19

6）中・近世 …… （森下） ……20

5．まとめ …… （森下） ……21

挿図目次

第1図　尾崎西遺跡調査区位置図 ……1
第2図　周辺遺跡分布図（1/50,000）……2
第3図　SK－5110実測図……4
第4図　主要遺構配置図(1) ……5
第5図　主要遺構配置図(2) ……7
第6図　Ⅲ区⑬SD－3012出土土器実測図 ……10
第7図　Ⅰ区①円形周溝墓ST－24平面図 ……11
第8図　Ⅰ区①円形周溝墓ST－24出土土器実測図 ……12
第9図　Ⅴ区流路出土土器実測図(1)……13
第10図　Ⅴ区流路出土土器実測図(2)……14
第11図　東側丘陵部古墳分布状況……15
第12図　Ⅰ区③ST－162石室実測図……16
第13図　Ⅰ区③ST－162出土遺物実測図……18
第14図　Ⅰ区①ST－03実測図 ……19

表目次

表1　調査区と地形区分 ……3

写真1　尾崎西遺跡遠景 ……3
写真2　Ⅴ区⑱貯蔵穴分布状況 ……4
写真3　SK－5110堅果類出土状況 ……4
写真4　Ⅲ区・Ⅴ区出土石器 ……9
写真5　Ⅲ区⑬SH－3074 ……9
写真6　円形周溝墓ST－24全景（南より）……11
写真7　極楽寺東古墳周濠検出状況（南より）……15
写真8　Ⅰ区③ST－162全景（東より）……17
写真9　Ⅰ区③ST－162石室内遺物出土状況……17
写真10　玉類出土状況……19
写真11　Ⅳ区⑭流路出土土馬……19
写真12　Ⅱ区⑦建物SB－2000 ……20
写真13　Ⅰ区井戸出土遺物……20

1．調査の経緯と経過

平成３年，香川県教育委員会は，県道高松長尾大内線の工事区域の内，三木・長尾・寒川地区の試掘調査を実施した。その結果，長尾地区の大川郡長尾町東の周辺において，11,000㎡の範囲で保護措置の必要な区間が新規に確認され，「尾崎西遺跡」と命名された。その試掘結果に基づき香川県教育委員会は，財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（以下センターと略称）及び香川県土木部道路建設課と協議を進め，平成４年度にセンターが事前調査を実施する点で合意し，平成４年４月１日付けでセンターとの間で「埋蔵文化財委託契約書」を締結した。なお，調査対象の11,000㎡の範囲内には，未買収地が1,000㎡含まれていた。そのためこの区画については，年度内の調査が懸案として残された。

調査は工事請負方式で実施した。また，調査は平成４年４月19日より開始され，平成５年３月19日に終了した。

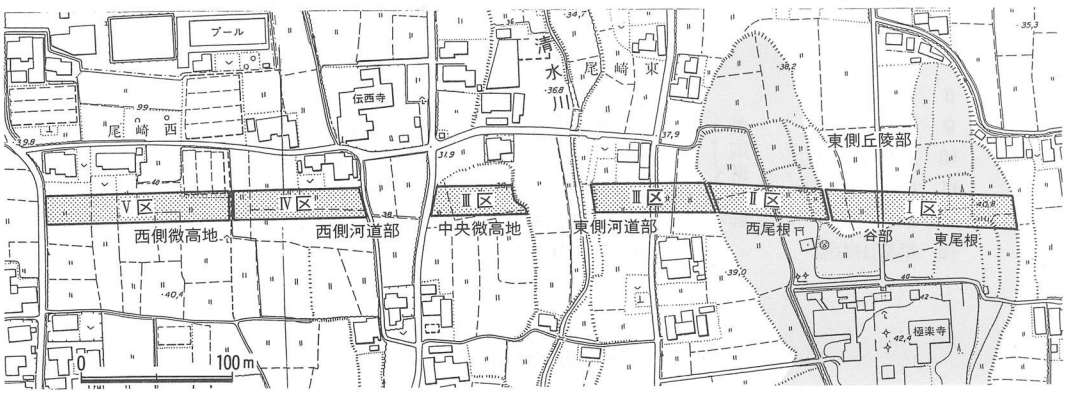
調査は，道路工事との関係で東より西にむけて進めた。４月中は仮設工事，５月初頭よりⅠ区から掘削作業を開始した。なお，この遺跡は当初予想していた以上に遺構密度及び出土遺物が多く，Ⅰ区中からは予想されなかった弥生時代後期の円形周溝墓，古墳時代後期の円墳等が検出された。そして，Ⅰ区の調査成果を中心にした現地説明会を７月25日に開いた。

４月より開始した本調査も，翌年の１月末の段階で概ね完了した。最後に残った未買収地区は12月に買収が終り，この地区も，翌年の１月初頭より調査を開始し，２月末で調査を完了した。３月は，基礎整理，仮設備の撤去等を実施し現地調査を完全に終了した。

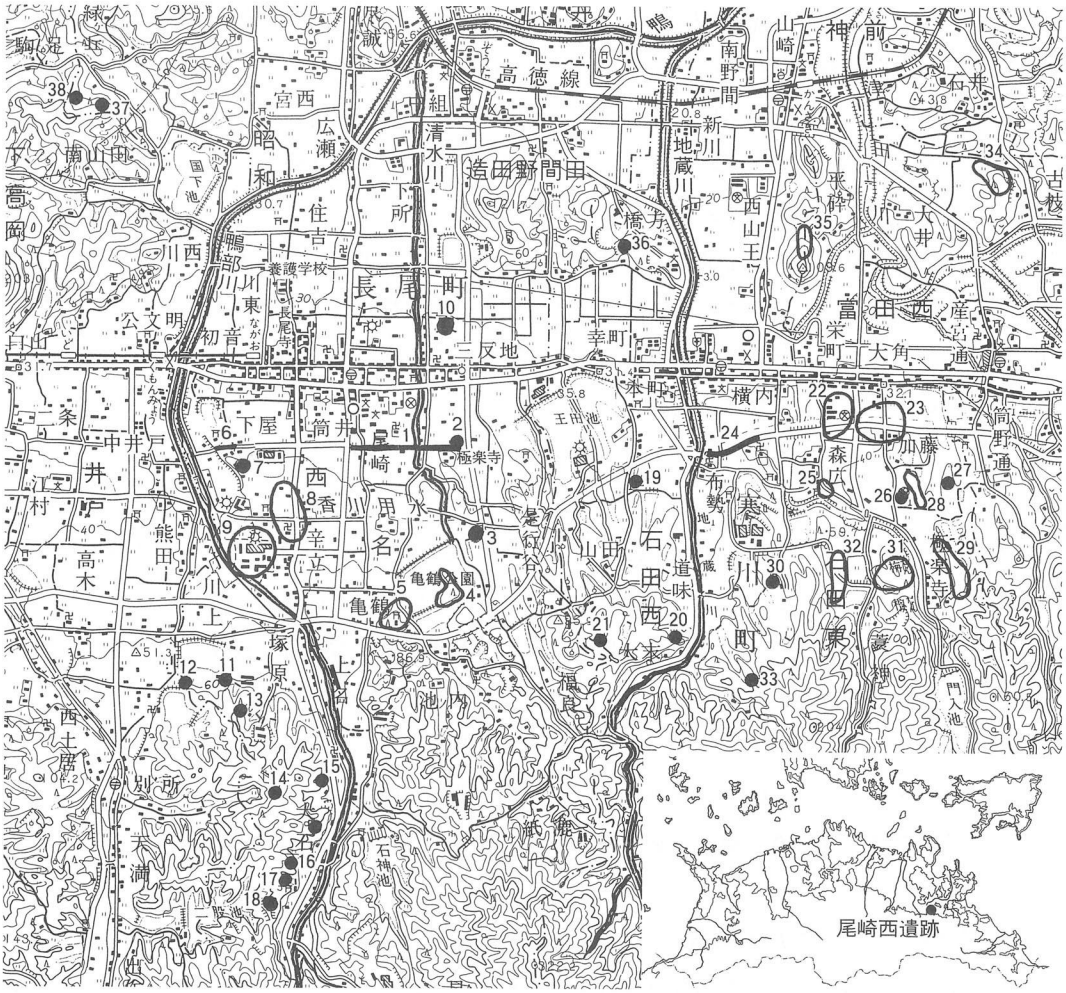
2．遺跡の立地と環境

尾崎西遺跡は香川県東部の大川郡長尾町東に所在する遺跡である。地形的には，南を阿讃山脈に，北を瀬戸内海にそって連なる山塊で画された盆地的様相の強い平野の南縁部にあたる。

今回の東西延長約700mの範囲に及ぶ調査地はその西側においては古清水川に起因する沖積地に，東側においては阿讃山脈の北縁に派生する前山丘陵から北にむかって舌状にのびる低丘陵の



第１図　尾崎西遺跡調査区位置図



1	尾崎西遺跡	14	丸井古墳	27	中尾古墳
2	極楽寺東古墳	15	椋の木古墳	28	相ノ山古墳群
3	観音院古墳	16	大石北谷古墳	29	極楽寺古墳群
4	亀島古墳群	17	大谷神社古墳	30	野崎古墳
5	宇佐八幡古墳群	18	前山古墳群	31	蓑神東古墳群
6	下屋古墳	19	赤山古墳	32	蓑神古墳群
7	若宮古墳	20	大末古墳群	33	道味古墳
8	辛立遺跡	21	山田古墳	34	大井古墳群
9	市畑遺跡	森広遺跡群 22	石田高校校庭遺跡	35	金山古墳群
10	三反地遺跡	森広遺跡群 23	加藤遺跡	36	天王山古墳群
11	川上古墳	森広遺跡群 24	布施遺跡	37	緑ケ丘古墳群
12	中代古墳	森広遺跡群 25	森広天神遺跡	38	陰浦古墳群
13	稲荷山古墳	26	極楽寺廃寺		

第２図　周辺遺跡分布図（1/50,000）

末端に相当する。

同様な低丘陵はこの地区から大川町富田まで，約5kmにわたってみられ，各所で古墳時代後期の小規模群集墳が築かれる。このうち当遺跡南方１kmの亀島・宇佐八幡古墳群は28基からなるこの地域最大の群集墳である。

この地域はまた古代寺院が多く分布する。寒川町石田の極楽寺廃寺では白鳳前期の四天王寺式伽藍が検出され，今回の調査地に隣接する宝蔵院極楽寺の創建期のものと推定されている。

写真１　尾崎西遺跡遠景

南北朝期以降，この地域は頻繁に土豪間の戦乱の舞台となる。当地を所領し，南方1.5kmの池内に里城をもつ寒川氏は応仁の乱の後，極楽寺との関係を深化させている。戦乱の状況下における，土豪と有力寺院の結びつきは時代背景を反映するものとして興味深い。

３．調査区の設定と地形区分

今回の調査地は幅20m，延長約700mの東西に細長い範囲である。これをⅠ区～Ⅴ区まで5分割し，大調査区を設定した。またこれと併用して全調査区を田地区画ごとに⓪～㉑まで細分し小調査区を設定した。以後，調査区名称としては「Ⅰ区①」のように大調査区と小調査区を組合せたものを基本とし，広い範囲を示す際には大調査区を単独で使用する。

また調査地が広範にわたるため調査区ごとに地形が異なっている。本文中で使用する地形区分と調査区との対応関係は表１に示すとおりである。

大調査区	小調査区	地形区分
Ⅰ区	⓪ ① ② ③	東尾根 → 東側丘陵部
	④ ⑤	谷　部 → 東側丘陵部
Ⅱ区	⑥ ⑦ ⑧ ⑨	西尾根 → 東側丘陵部
Ⅲ区	⑩ ⑪ ⑫	東側河道部
	⑬	中央微高地
	⑭	西側河道部
Ⅳ区	⑮ ⑯ ⑰	西側微高地
Ⅴ区	⑱ ⑲ ⑳ ㉑	西側微高地

表１　調査区と地形区分

4．調査成果の概要

1）縄文時代

確認した遺構は，東側丘陵部に分布する土坑群，西側微高地縁辺に分布する貯蔵穴群などがある。いずれも晩期に属す。他に東側河道部で後期土器の希薄な堆積層を確認している。

西側微高地縁辺の貯蔵穴群

Ⅴ区⑱で５基を確認した。いずれも埋土の下位で堅果類を出土しており，堅果類用の貯蔵穴と判断できる。直径1.0m，深さ0.4～1.0mほどの規模で5基が一箇所に集中して分布する。このうちSK－5110では最下層の砂層中に，果肉が腐朽した堅果が多数認められた。直上の黒色粘土層には木の葉・枝が重なって堆積しており，猪と思われる歯牙や晩期前半の深鉢も同一層より出土している。堅果類出土層は比較的薄く，木の葉等を含む層に廃棄物が認められること，また埋土の中位以上は自然堆積によると考えられることなどから，すでに貯蔵を終えた堅果類を取り上げた後，ゴミ穴として転用された可能性が高い。

東側丘陵部の土坑群

東西２箇所の尾根上平坦面を中心に円筒形土坑10基，方形土坑7基が分布する。平面規模１～２m，深さは0.6～1.2mで，方形土坑の床面には例外なく小ピットを伴っている。出土遺物は少なく，SK－31において晩期末の凸帯文深鉢が１点出土したにすぎない。これらは当初「貯蔵穴」としての機能を考えていたが，出土遺物が稀少であること，小ピットが認められることなどから，方形のものについては特に「落し穴」としての機能も検討する必要がある。

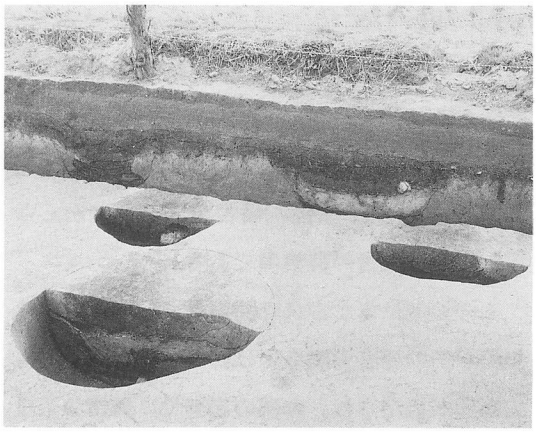


写真２　Ⅴ区⑱貯蔵穴分布状況

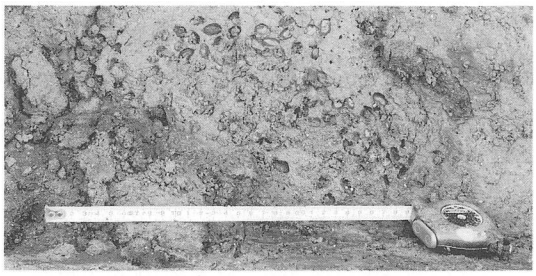
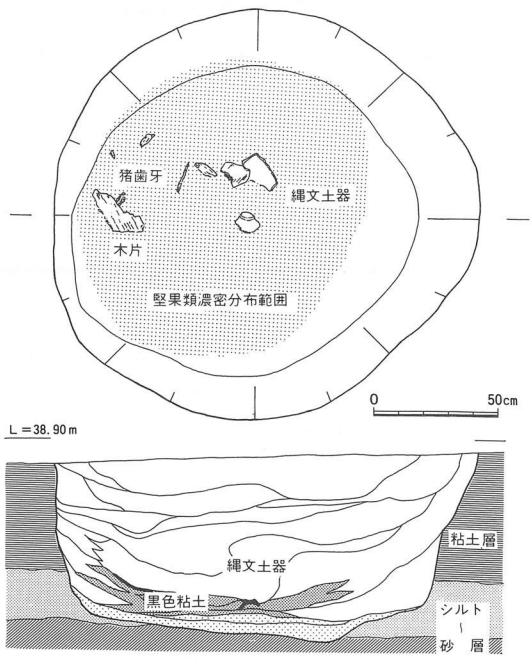


写真３　SK－5110堅果類出土状況



第３図　SK－5110実測図

極楽寺東古墳

極楽寺西古墳

縄文時代
弥生時代，古墳時代
古代，中・近世

X＋139,740
X＋139,720
X＋139,700
Y＋63,100
Y＋63,200
Y＋63,000

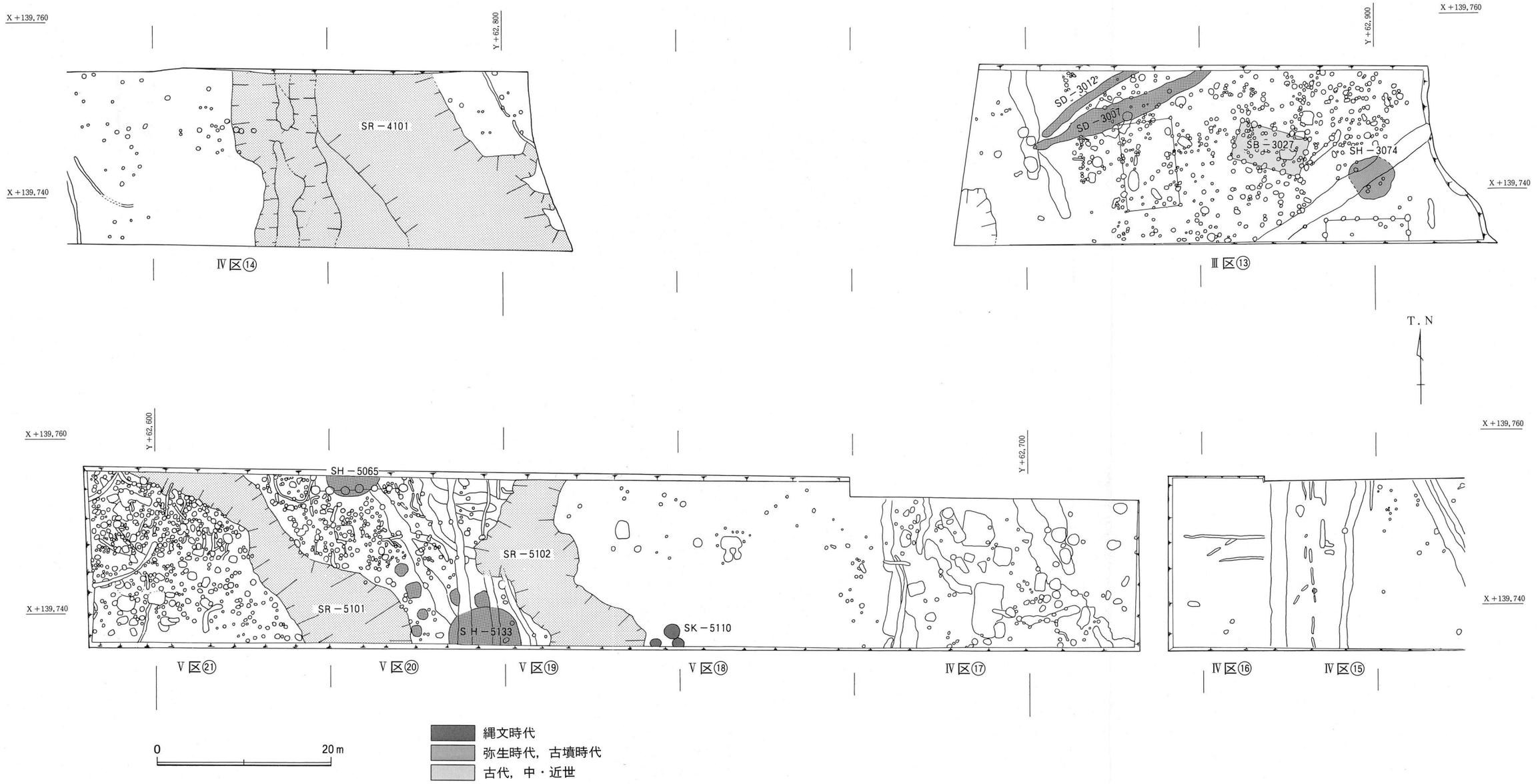
Ⅰ区④ Ⅰ区② Ⅰ区⓪
Ⅰ区③ Ⅰ区① Ⅰ区⑤
Ⅱ区⑦ Ⅱ区⑥ Ⅱ区⑨ Ⅱ区⑧
Ⅲ区⑫ Ⅲ区⑪ Ⅲ区⑩

SB－2000
SD－2001
SE－2270
SX－366
SE－325
SK－31
極楽寺東古墳周濠
ST－24
ST－03
ST－407
ST－162
ST－2370
ST－2369
ST－2366
SR－3073

T．N

0　20m

第４図　主要遺構配置図（１）



第５図　主要遺構配置図（２）

2）弥生時代前期・中期

当該期の遺構は中央微高地および西側微高地に分布する。西側微高地西端Ⅴ区⑳㉑では黒色砂を埋土とする遺構を多数確認した。これらの遺構は層位的に古墳時代後期を下限とするものであるが，埋土の微細な相違や遺構の形状から当該時期に比定しうるものを含んでいる。確実なものとして土坑を６基検出した。櫛描文を施す如意状口縁の甕形土器などが出土している。また少量ではあるが当該時期の遺物を出土する柱穴も存在しており，集落域の一画である可能性が高い。

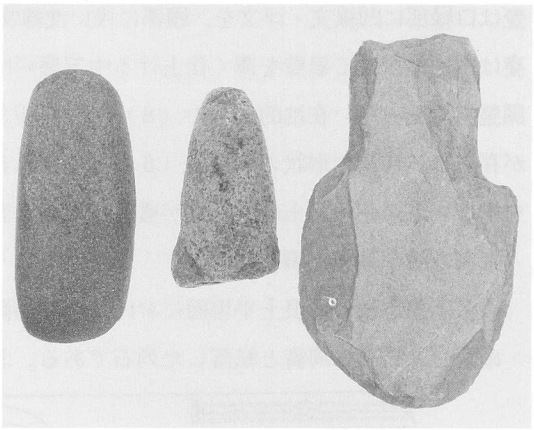


写真４　Ⅲ区・Ⅴ区出土石器

中央微高地Ⅲ区⑬では幅2.0m，深さ0.6mの溝SD－3007を確認した。埋土中より前期前半を中心とする土器や，安山岩製の打製石鏃（写真４右），サヌカイト剥片などが少量出土している。

西側微高地から西側河道部にかけての3本の自然流路はいずれも下位堆積層に前期後半～中期前半の遺物を包含する。全体的な遺物量は少ないが，幅７m，深さ1.3mのSR－5101では磨製石斧（写真４中・左）３点のほか，サヌカイト製石器などが出土している。この流路はわずかながら弧を描いて南から北西に走行しており，あたかも先の集落域を取り囲むようにも観察できる。人工的に掘削された環濠である可能性も検討する必要がある。

3）弥生時代後期・終末期

当該期の遺構は，中央微高地および西側微高地において竪穴住居や溝・流路を，東側丘陵部において墳墓遺構を検出した。

中央微高地の遺構・遺物

竪穴住居1棟，溝1条を検出した。SH－3074（写真５）は直径約５mの不整円形の竪穴住居で，後世の溝掘削により中心部を破壊されるが，ベッド状遺構や主柱穴が確認できる。主柱穴は不規則に配されており，多角形住居の可能性もある。後期中葉の土器が少量出土した。

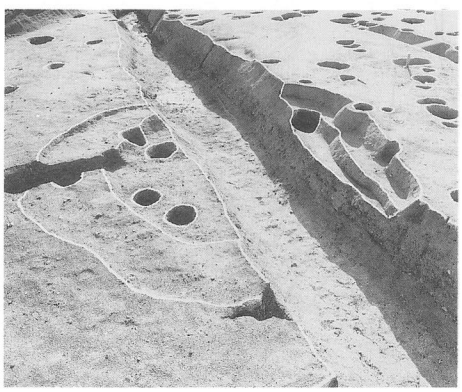


写真５　Ⅲ区⑬SH－3074

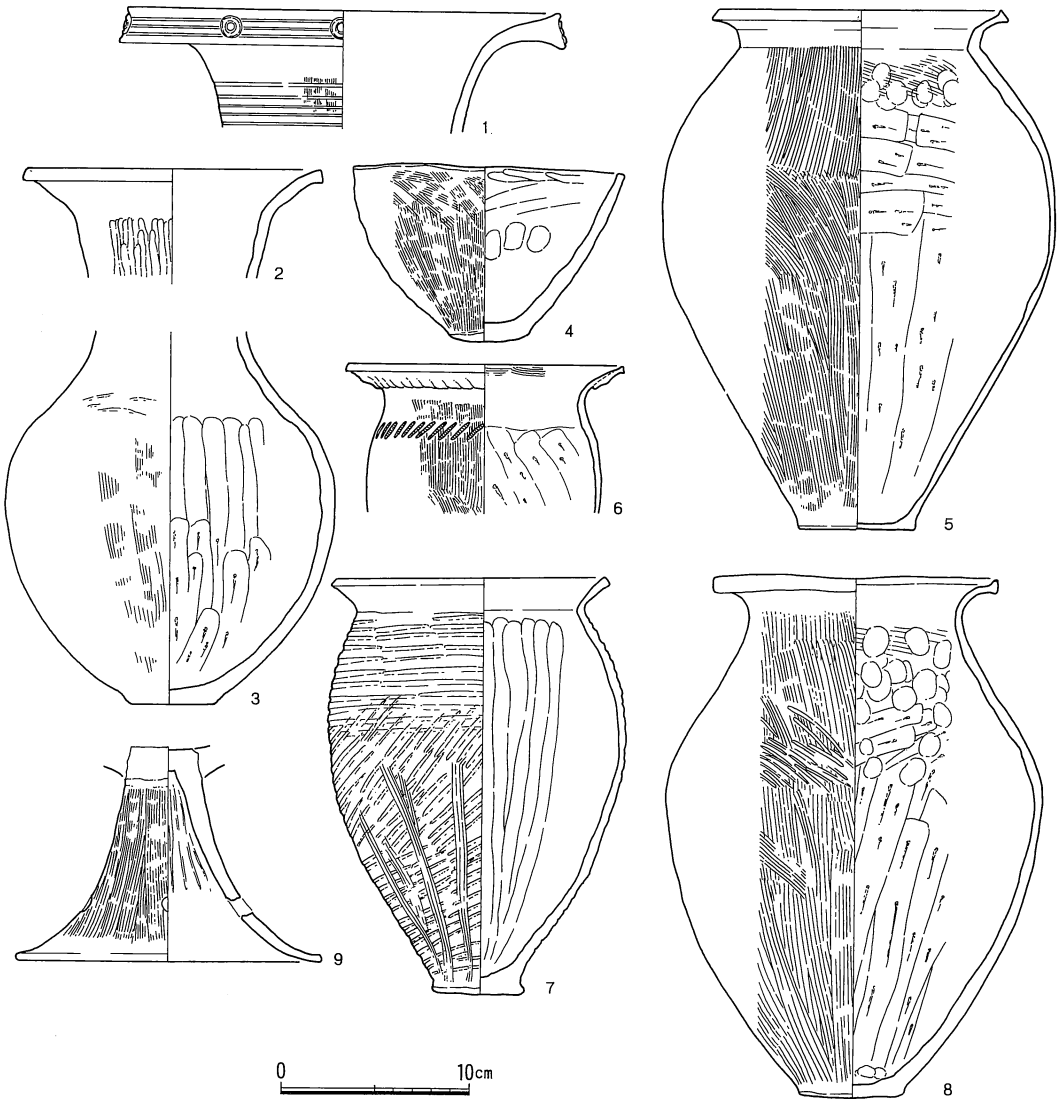
SD－3012は幅0.8m，深さ0.3mの小規模な溝である。微高地の方向に斜交して走行する。埋土上層より後期後半の土器群とそれに伴って玉砥石が1点出土している。土器群（第６図）は，出土量としてはさほど多いものでないが，各器種が揃った一括資料である。

壺は口縁部に凹線文・浮文を，頸部に浅い沈線文を施す広口壺（1）や長頸壺（2）が存在する。甕は内面篦削りで器壁を薄く仕上げる中部瀬戸内的な様相を持つもの（5），外面が粗雑なハケ調整で器壁も厚い在地的なもの（8），外面叩き調整を残す近畿的な様相を持つもの（7）などが存在し，特異な形状の搬入品（6）も含まれる。また，後期後葉から終末期にかけて高松平野を中心に茶褐色系胎土の土器群が盛行するが，当資料中には破片も含めて確認できない。

東側丘陵部東尾根墳墓遺構

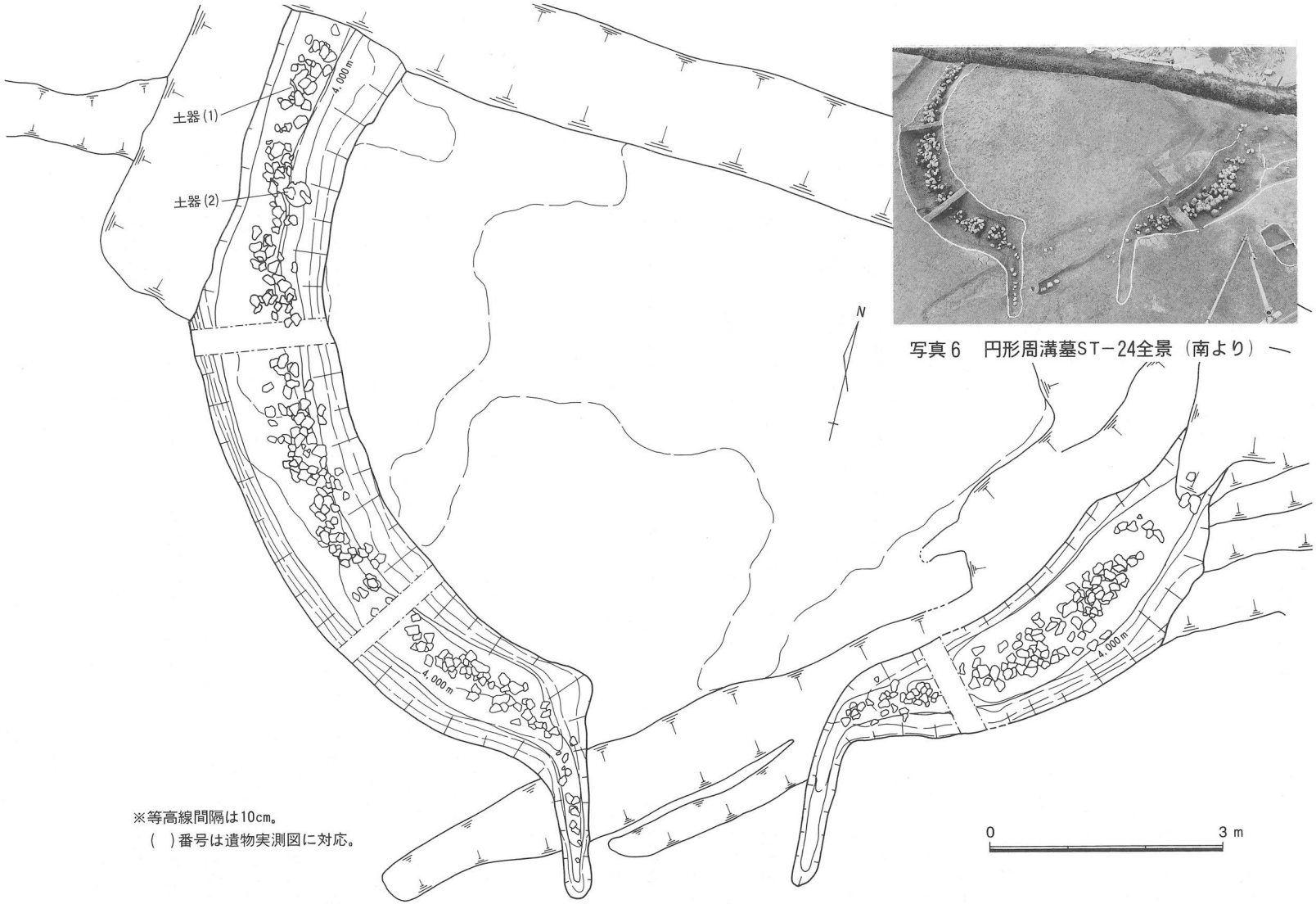
Ⅰ区①東尾根の尾根上平坦面において円形周溝墓を1基検出した。

確認した施設は周溝と転落した列石である。北側半分は後世の圃場改修で破壊され，主体部や



第6図　Ⅲ区⑬SD－3012出土土器実測図

写真６　円形周溝墓ST－24全景（南より）

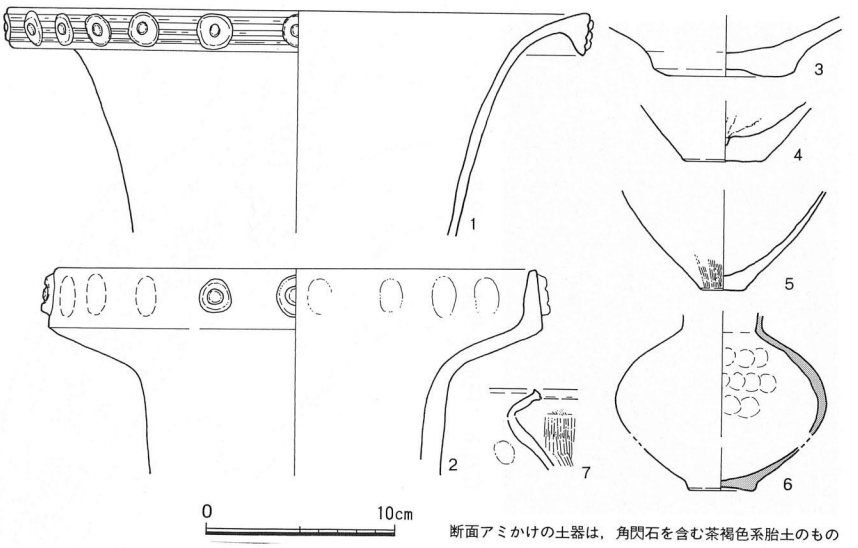


※等高線間隔は10cm。
（　）番号は遺物実測図に対応。

第７図　Ⅰ区①円形周溝墓ST－24平面図

盛土もまた削平をうけて消滅している。

周溝墓円丘部の平面的規模・形状は遺存箇所から推定して直径約12m，真円に近い円形となる。これに後述する突出部が約3mの長さで南側に付属する。



断面アミかけの土器は，角閃石を含む茶褐色系胎土のもの

第８図　Ⅰ区①円形周溝墓ST－24出土土器実測図

周溝は幅約1.8m、深さ約0.6mをはかり，断面U字形を呈する。周溝の南側は幅３m程にわたって途切れ、そこから南側に深さ0.1m程の細く浅い溝が長さ約３mにわたってそれぞれ両側から延びている。この２本の溝は規模を拡張することなくそれぞれ直線的に収束しており、両溝を結合するような溝はみられない。

周溝内には10～20cm大の多数の礫、供献用と思われる二重口縁壺口縁部１点、広口壺口縁部１点等が出土している。礫や土器は周溝の底場から0.1m程浮いた状態で検出しており、いずれも原位置を遊離し、落ち込んだ状態にあったものと考えられる。そのうち広口壺については底場にかなり近い位置から出土している。

主体部については、上面の削平によってすでに残存せず、旧状を知るすべはないが、周溝が比較的深く残存しているにもかかわらず、すでに削平され尽くしているところからすると、あまり深い掘り方をもつ主体部ではなかったものと推定される。

周溝より出土した土器は、先の壺２点を含めて第８図に示している。（２）は二重口縁の壺で、直立する短い口縁部の外面に等間隔に円形浮文を貼り付け、胎土は大粒の石英などを含む赤褐色の粗雑なもので，きわめて在地的な様相をもつ。（１）は口縁部がラッパ状に開く広口壺で、拡張された口縁端面に３条の浅い凹線文・浮文をもつものである。（６）は角閃石を含む茶褐色系の胎土の小型の壺である。頸部以上の器形が不明であるが，胴部の張りはあまり顕著でなく，平底を残している。そのほか器壁が薄く平底の赤褐色系甕（７）が出土している。

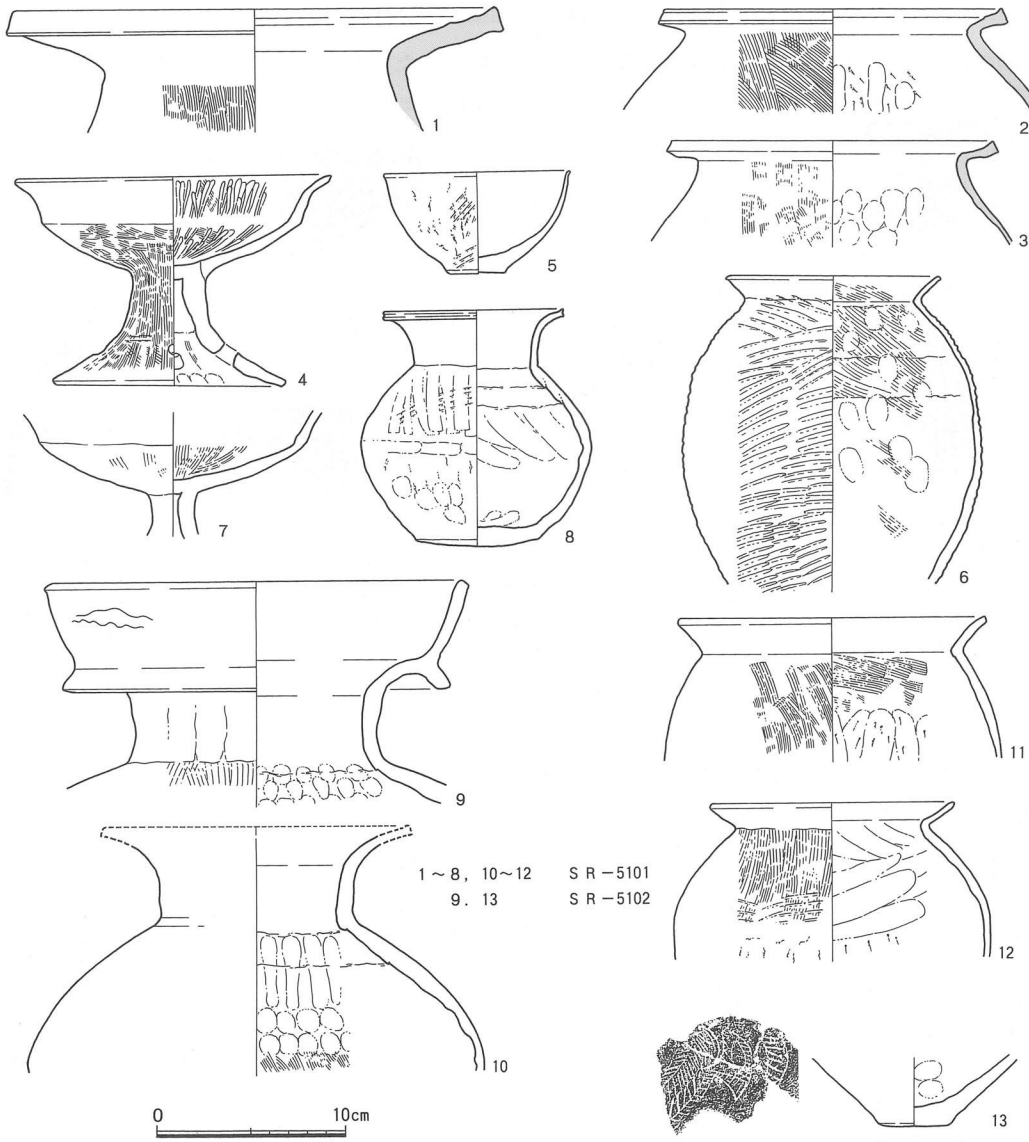
当該遺構の所属時期は広口壺の形状，平底を残す小型壺などから，後期後葉を下らない時期と考えられる。

西側微高地の遺構・遺物

Ⅴ区⑳㉑は黄白色粗砂の脆弱な基盤に弥生前期から古墳時代後期までの多数の柱穴や土坑が集

中して存在し，その縁辺に弥生前期から継続する2条の流路（SR－5101・5102）が認められる。遺構の集中する箇所は当該期のものを明確に抽出することは困難であるが，2条の流路に挟まれた幅25mの範囲に当該時期の円形竪穴住居2棟，溝1条が検出された。また流路の中・上層では終末期から古墳時代前期まで継続すると考えられる多量の土器群が出土している。いずれの流路も古墳時代中期ごろと推定される流路の再掘削に伴って層序が乱されており，中層の黄灰色砂層上位まで古墳時代中期以降の土器が混在する。

2条の流路より出土した土器は28ℓ入コンテナにして約200箱におよび，土器以外に匙，鋤などの木製品も少量出土している。



第9図　Ⅴ区流路出土土器実測図(1)

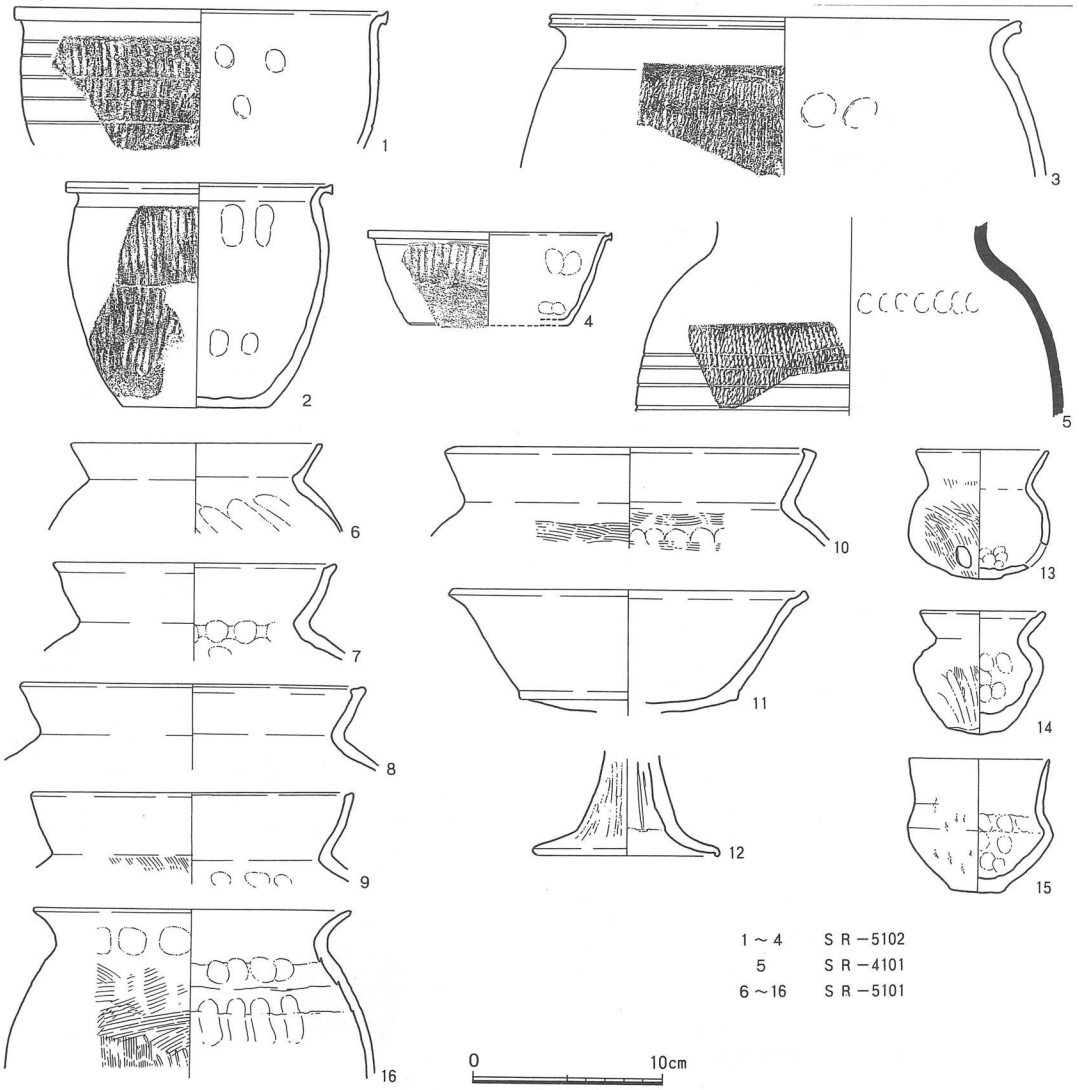
4）古墳時代

当該期は西側微高地・西側河道部の流路や自然河川において土器等を出土するほか，東側丘陵部の2本の尾根で古墳・土壙墓といった墳墓遺構を確認した。

西側微高地・西側河道部の遺構・遺物

Ⅴ区㉑SR－5101とⅤ区⑲SR－5102は弥生前期から継続する流路で，主として埋土上層より当該時期の遺物が出土する。

出土土器のうち注目すべきものとして韓式系土器がある。器種としては軟質平底鉢（第10図1，2，4），長胴甕（3）があり，ほかにSR－5101から韓式系土器の影響の下で製作されたと見られる土師器の甑なども出土している。平底鉢は外面縦方向の平行叩きで，螺旋状沈線を持つものと持たないものがある。口縁部は短く外反し端部に拡張した面を持つ。長胴甕は外面に細かな縄



第10図　Ⅴ区流路出土土器実測図(2)

蓆文をもち，口縁端部に浅く沈線を施している。胎土は在地系のものと比べてほとんど差を見い出せない。

ほかの土器の様相は，新しい段階の布留式系甕・高杯や粗雑な仕上げの小型丸底土器などの土師器が目立ち，須恵器はほとんど含まれていないことから，韓式系土器およびそれに伴出するとみられる土師器は概ね5世紀前半代に相当すると考えられる。土器以外には滑石製の有孔円盤が1点出土している。

Ⅳ区⑭のSR－4101では赤褐色の陶質土器（５）が出土している。外面に縄蓆文叩きを残し，螺旋状沈線を施す壺である。内面には回転ナデ痕が観察できる。河川出土のため伴出遺物を特定できないが，河川からは６～７世紀の須恵器の出土が目立っている。

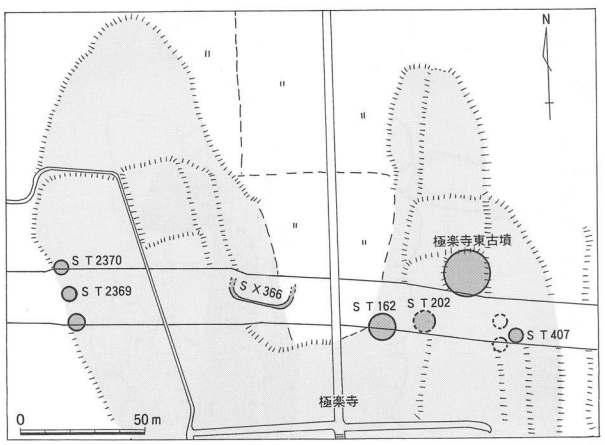
東側丘陵部の墳墓遺構

Ⅰ区の東尾根では，周知の極楽寺東古墳の周濠の一部（写真７）を検出した。これによって当古墳が墳丘規模約20mの大型墳であることが判明した。また今回あらたに２基の横穴式石室をもつ古墳を確認するとともに，古墳の周辺に土壙墓と考えられる遺構も数基検出した。

Ⅱ区の西尾根では極楽寺西古墳の隣接箇所を調査したが，当古墳に関する手がかりは得られなかった。西尾根の西縁辺部では不定形な溝が存在し，６世紀中葉～後葉の須恵器が出土している。溝の形状から，古墳の周濠の痕跡と推定され，直径５～６m程度の３基の小規模な古墳（ST－2366, 2369, 2370）が近接して築造されていた可能性が高い。尾根東側の斜面地では須恵器を包含し，隅丸方形状にめぐる溝（SX－366）を確認した。一辺約25mをはかり，かなり大型であることからこれについては古墳であるかどうか不明である。

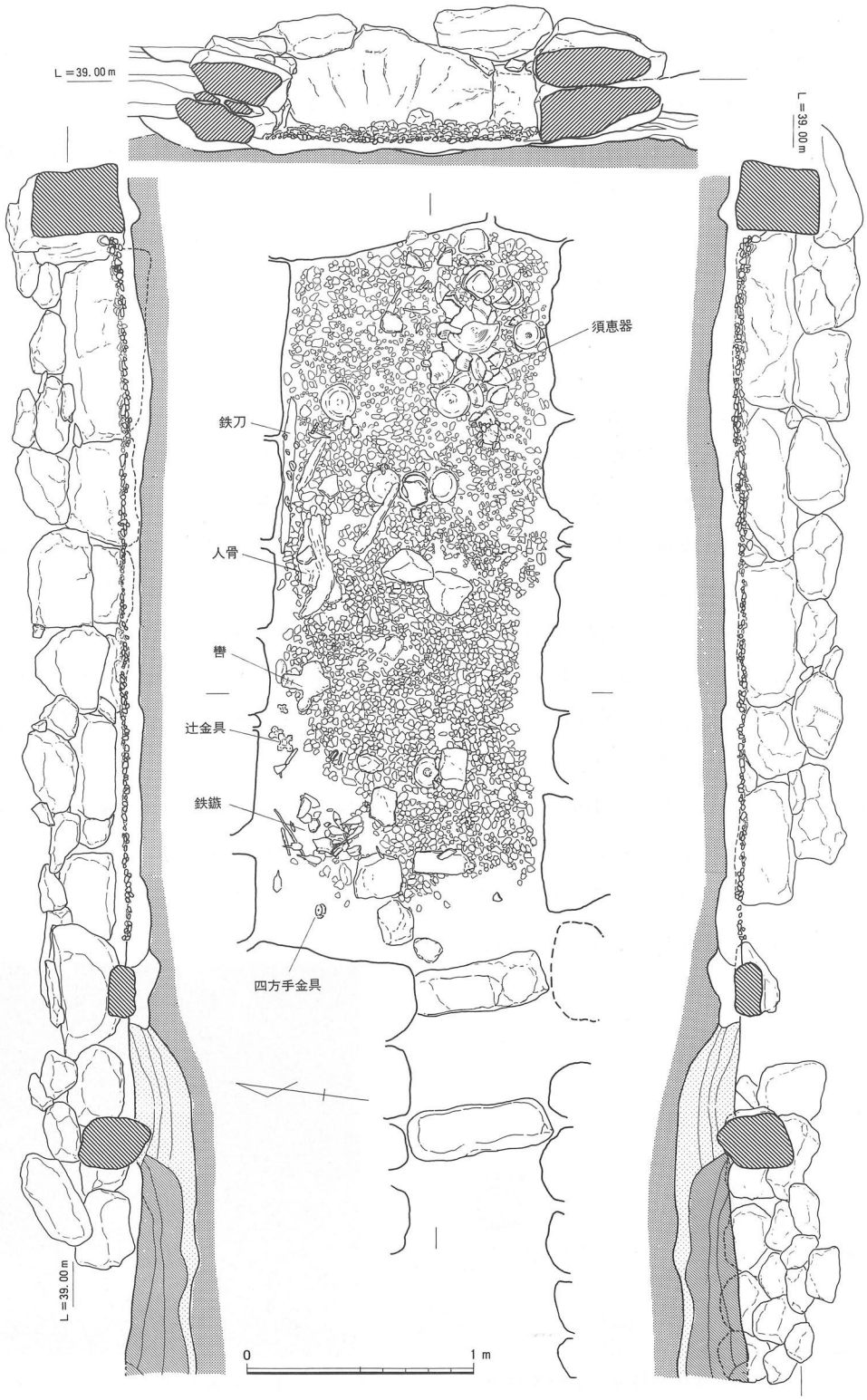
２本の尾根からなる丘陵部は中世に宝蔵院極楽寺がおかれて以降，かなり大規模な削平を被っている。今回の調査で既に埋没した古墳や，削平された古墳の痕跡を断片的に確認したが，本来丘陵の大部分に古墳が築かれ，群集墳を形成していた状況は想像に難くない。

以下，古墳１基，土壙墓１基について抽出して詳説する。



第11図　東側丘陵部古墳分布状況

写真７　極楽寺東古墳周濠検出状況（南より）



第12図　Ⅰ区③ST－162石室実測図

Ⅰ区③ST－162は北側の谷に落ちる尾根の斜面上に築かれた円墳で、周濠の一部と石室が遺存している。墳丘と石室の上部及び遺構の北側は後世の整地のため失われているが、墳丘の直径は11m程度と推定される。石室は右片袖式の横穴式石室で西向きに開口する。

写真８　Ⅰ区③ST－162全景（東より）

玄室の石組は２段だけが残り、長さ3.3m、幅1.3m、高さ0.5mをはかる。床面には３cm前後の大きさの礫がほぼ全面に敷かれ、礫床を形成している。

床面南西部は盗掘によると思われる攪乱を被っているが、同北西部から馬具や武器類及び耳環が、中央部北壁付近には鉄刀や人骨、南東部奥壁付近には集積された須恵器と玉類等多数の遺物が出土した。

羨道部は長さ1.8m、幅0.65mをはかり、石組は南側に概ね３段、北側は２段が遺存している。ただし、石材の大きさは玄室の石材と比べ２分の１から３分の１程度である。玄門部と，そこから0.6m西側の羨道部の２ヶ所に仕切石が置かれている。羨道は玄門の仕切石を境に玄室床面よりさらに0.25m程低く掘削され、そのまま西の墓道に接続している。羨道部の仕切石は追葬時に設置されたものとみられ，一旦埋没した羨道および墓道をその仕切石を境に再掘削している状況が，下層断面で確認できる。

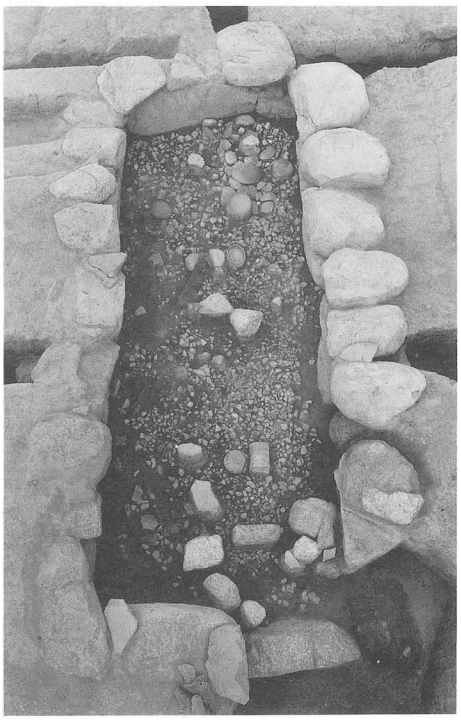


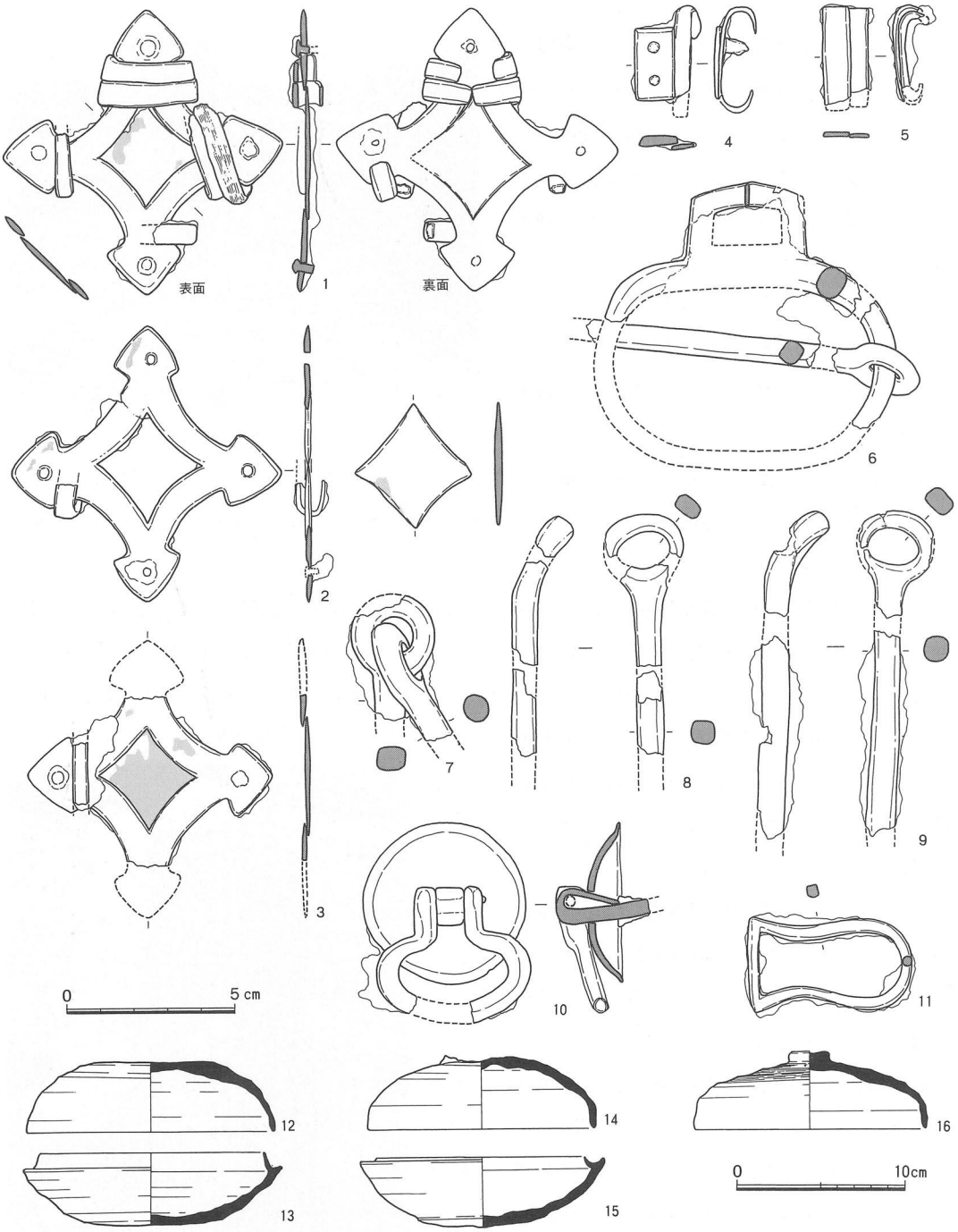
写真９　Ⅰ区③ST－162石室内遺物出土状況

玄室床面より出土した須恵器には坏，高坏，提瓶がある。第13図12・13および14・15は出土状況から見てそれぞれセットをなす。特に後者は蓋と身が焼成時に溶着した痕跡を留めている。

武器類は鉄鏃数点と鉄刀１振がある。馬具は素環鏡板２点，引手金具２点，ハミといった轡関係（６～９）が一式，四方手金具（10），そして鉄地金銅張の組合せ式板状辻金具（１～３）３点，同じく鉄地金銅張の雲珠脚部推定品（４）などが出土している。

装身具として耳環２点とガラス小玉がある。

玄室以外では石室基底の掘り方埋土および礫床下部の置土中より須恵器が少量出土し古墳築造の上限を示すほか，周濠からは須恵器の甕や土師器の坏などが出



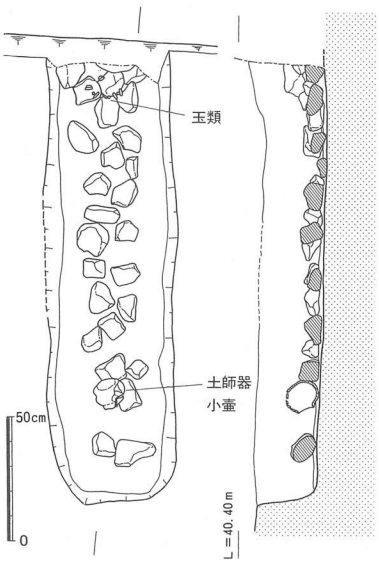
第13図　Ⅰ区③ST－162出土遺物実測図

土している。

須恵器の型式は６世紀末～７世紀前葉で３型式ほどの時期幅をもつ。羨道部の土層観察によって最低２回の埋葬を確証したが，実際にはそれ以上の追葬を想定する必要があろう。

ところで礫床上に転落石とは考え難い13個の石を検出した。これらの石はその上端の高さを同じくする２つのグループに分けられる。奥壁側のものは奥壁付近に破砕して密集する須恵器群の上端と一致し，また玄門側のものは玄門の仕切石の上端と一致する。このことはこれらの石や須恵器が追葬時に棺台として利用されていたことを示唆している。今後，副葬品出土位置等の分析とともに石室内の棺配置を検討する重要な材料になり得る。

Ⅰ区①ST－03はほぼ東西主軸で長方形状の平面形を持つ土壙墓である（第14図）。長さ2.0m，幅0.5m，現存する掘込みの深さは0.3mである。



第14図　Ⅰ区①ST－03実測図

床面には５～10cm大の花崗岩亜角礫を敷く。東端では礫が２段に積まれて高くなっている。その東端の礫直上より多数の玉類が出土した。玉類の構成は管玉10点（碧玉製９・グリーンタフ製１），算盤玉２点（水晶製），ナツメ玉１点（埋木製），ガラス小玉多数である。玉類は直径約10cmの円形に近い出土状況（写真10）を示すことから，当該箇所が被葬者頭部に当たることがわかる。西側の足元付近からは土師器小壺が出土している。

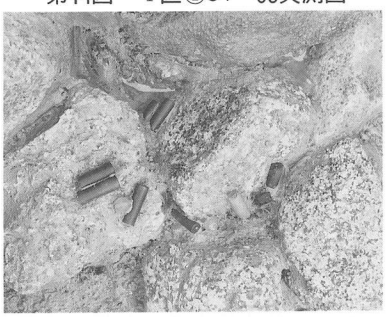


写真10　玉類出土状況

土師器は古墳時代後半期に広くみられるものであるが，玉類の構成は６世紀後半期の横穴式石室墳より出土するものに類似している。また，墓壙埋土の上層より７世紀の須恵器片が出土していることから遺構の年代は６世紀後葉を中心として相前後する時期と推定される。

周辺には土壙墓が３基以上存在する。ST－03はそのうち突出した優位性を示す。県内調査例でもこのような副葬品を保有する土壙墓は稀少であり，古墳を含めた当該墳墓群の政治的背景を検討する上で重要な資料といえる。

5）古代

Ⅲ区の中央微高地では，掘立柱建物が多数検出された（第４図）。これらは柱穴より遺物を出土するものが非常に少なく，所属時期を特定できないが，埋土の色調などの特徴により，古代の範疇に含めてよいものがある。SB－3027は暗褐色系の埋土で直径約0.5mの柱穴からなる桁行４間，梁間３間の掘立柱建物である。占有面積は36㎡を占める。ほかに暗褐色系の埋土で建物方位が異な

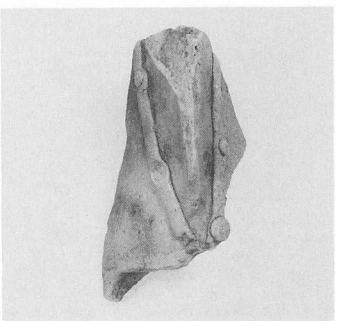


写真11　Ⅳ区⑭流路出土土馬

るものもあり，複数時期の建物が存在した可能性が高い。

Ⅳ区西側河道部SR－4101西端では７世紀中葉～８世紀後半の遺物を出土する単独の流路を確認した。中・下部堆積層は７世紀後葉までの遺物が多く，それに伴って土馬片が１点出土している（写真11）。首～胴上半の部位で，皮帯や飾鈸を浮文で表現する飾馬である。体部は中空で，胎土は瓦質に近い。残存長９cmをはかる。

Ⅳ区SR－4101の上層は９～10世紀の遺物が多く出土する。移動式竈や緑釉陶器などが出土している。

6）中・近世

Ⅰ・Ⅱ区東側丘陵部で14世紀中葉以降の遺構群を確認した。またⅢ区の中央微高地に存在する多数の柱穴のうち14～15世紀の中国産青磁を出土するものがある。

Ⅰ・Ⅱ区の丘陵部は，南から北へ舌状に伸びる東西2本の尾根と，その間の谷からなる。調査地から南約70mの地点が谷頭となり，そこが2本の尾根の付け根となっている。現在谷頭には，1339年に当地に移築されたとの記録が残る，宝蔵院極楽寺が存在する。

検出した遺構としてはⅡ区西尾根上の平坦面およびその東縁辺において掘立柱建物３棟，井戸２基，土坑６基，溝１条があり，Ⅰ区谷部両側縁のテラス部分には掘立柱建物１棟，井戸５基などがある。Ⅰ区東尾根上の平坦面では密集する柱穴群が検出され，掘立柱建物が何度も建て直された状況が推定される。他に溝が１条検出されている。これらの遺構からは14世紀中葉～18世紀後半の多くの遺物が出土している。

西尾根Ⅱ区⑥のSD－2001は幅1.0m，深さ0.5mの断面逆台形状の溝である。北西方向に走行するが，調査地南側で北東に屈曲し直角に向きを変えている。その西側に溝と方向を同じくする柱穴列SB－2000が延長18m分検出され，さらに柱穴列は北東方向に伸びるようである。溝が屈曲する南側はそれに対応するように柱穴列が途切れ，北東側の３間の柱穴列に接続している。柱穴列が存在するⅡ区⑦と，溝が確認されたⅡ区⑥とは後世の田地造成によって約0.6mほどの段差があり，柱穴列と溝との間がかなり削平されているものと考えられる。したがって，柱穴列は

写真12　Ⅱ区⑦建物SB－2000

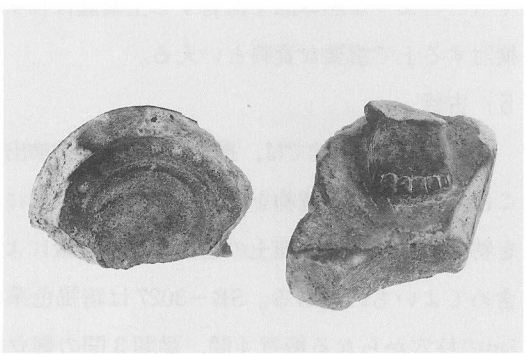


写真13　Ⅰ区井戸出土遺物

本来溝に平行した細長い掘立柱建物であって，東側の桁柱穴がすでに消滅しているものと推定することができる（写真12）。溝からは15世紀ごろの備前焼摺鉢，土師質三足羽釜，土師質鍋など調理用雑器類が多数出土しており，建物の機能を考える上で興味深い。

井戸は合計７基検出されている。深さは２～６ｍで，総体として深いことが特徴である。内部構造はSE－325において木組み井戸枠を確認したが，ほかは完全に崩壊しているものが多く，明らかでない。特異なものとして，最も深いSE－2270において五輪塔の大型石材を石組みとして転用した痕跡を確認している。これらの井戸は出土遺物からそれぞれ時期差が認められる。詳細は本報告に譲るが，14世紀代のものから18世紀代のものまで幅広く認められる。

各遺構から出土した遺物には巴文軒丸瓦（写真13左）・唐草文軒平瓦などの瓦が多く含まれている。そのほか瓦質の組合せ式小型仏像の足部片（写真13右）と推定されるものも出土している。これらは南接する極楽寺との関連性を強く示唆するものである。

５．まとめ

今回の調査の要点をまとめておく。

西側・中央微高地では縄文時代から古墳時代にかけての多数の遺構・遺物が検出された。なかでも，堅果類貯蔵穴は縄文時代の集落遺跡が周辺に埋没している可能性を示唆するものとして重要である。また，微高地を流れる流路より出土した韓式系土器は，昨年度高松市六条上所遺跡で出土したものに次いで，平野部遺跡出土例として２例目であり，今後も類例が増加するものと思われる。

東側丘陵部では弥生時代後期後葉の円形周溝墓をはじめとする墳墓遺構を検出した。弥生時代の周溝墓は近年，県内で発見例が増加しているが，東讃地方ではでは今回が初例である。弥生時代墓制のありかたを検討する上で重要な資料である。

また，東尾根や西尾根で検出した古墳・土壙墓群は，隣接する極楽寺東古墳・西古墳とともに当該丘陵上に展開する群集墳の一画である可能性が高い。今後，周辺地区の状況を慎重に見守っていく必要があろう。

さらに，東側丘陵部では中世の有力寺院「宝蔵院極楽寺」に関連するとみられる遺構群を検出した。極楽寺に関しては当寺の年代記である「紫雲山宝蔵院古暦記」等の文献資料が残っており，それらと今回検出した遺構群との対比，検討が今後の課題として残されている。

以上，今回豊富な遺構・遺物が検出されたにもかかわらず，簡略な概要報告となったが，今後，十分な整理作業を行なって慎重に資料化を進めていきたいと考えている。

県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報

尾崎西遺跡

平成4年度

平成5年3月31日

編　集　(財)香川県埋蔵文化財調査センター

発　行　香川県教育委員会
　　(財)香川県埋蔵文化財調査センター

印　刷　富士印刷株式会社